

中国人の日本像、日本人の中国像

中国五四文化革命期における東亜同文書院日本人学生の中国調査旅行記録（一九二三・一九二五）を読む

〇三七〇七一 康 登華

凡例

- 一、「中国調査旅行記録」の引用は、『中国を歩く』（東亜同文書院・中国調査旅行記録 第二巻、藤田佳久編著、大明堂）による。なお、引用文には漢字片仮名混じりのものと漢字平仮名混じりのものがある。これはすべて『中国を歩く』の表記のとおりである。
- 一、J I S 第二水準漢字で表記できない漢字については、ひらがなで表記する。

目次

はじめに

第一章 中国人との面会に見られる、中国人各階層の日本認知度の違い

第一節 京漢、京奉沿線企業貿易調査旅行日誌（一九二三年） 老軍人談

第二節 「秦隴南路調査旅行日誌」（一九二五年） 日本人学生、英米人に誤認される

第三節 隅々に存在していた反日感情 名妓の着物引き裂き・小学生の排外デモ

第四節 中国知識人たちの対日感情

一、唐汝南氏からの贈詩

二、劉さんと日本人の奥さん

三、伎山県の知事

第五節 小結 「旅行記」から見た中国人の対日観

第二章 日本人学生の中国認識に関して

第一節 中国文化への強烈な興味

第二節 強い民族プライドとナショナリズムを含む中国認識

第三節 欧米列強との競争心

第四節 近代中国人の国民性への批判

一、公德心の欠如

二、活気の欠如

三、女尊男卑

四、残忍性

第五節 小結 日本人学生の人生を変えた中国体験

第三章 「旅行記」から見た二〇年代中国社会の変革と階級関係

第一節 洋と官の関係

第二節 民と官の関係

第三節 民と洋の関係

第四章 一九二〇年代の日中両国青年における愛国観の比較

おわりに 「中国調査旅行記録」の現代的意義

一、中国人反日感情に関する誤解の是正

二、中国の民主化に関して

三、相互にずれのある四つの像

四、本稿執筆動機について

注

参考文献

要旨

はじめに

一九一九年に中国で起こった五四運動は、中国現代史のはじめと見なされている。当時、中国国民は、それまでドイツに占拠されていた中国領土の青島の主権が、同じ第一次世界大戦の戦勝国である日本に渡されることに対し、一気に怒りを爆発させ、中国全土で反帝国主義、反封建運動を起こしていた。一九一九年から三〇年代前半までの五四文化革命時期のおよそ十数年間、軍閥割拠、戦争頻発の一方で、様々な外国思想が中国に流入し、中国の伝統的な思想が批判を受けるとともに、各領域で革新が行われ、思想界の論議が活発となっていた。一九一九年の五四運動から一九二七年に中国統一した北伐戦争までの五四文化革命期は、中国歴史上、孔子が誕生した春秋時代と同列に論じられるとされている。

延延と続いた数千年の封建伝統社会を変え、斬新な中国を建設しようとするなかで、中国は意識の変革を迫られていた。社会体制などの面では、民主化への激変が起こる一方で、一八四〇年の中英アヘン戦争以来、列強に虐められてきた弱国が、初めて第一次世界大戦の戦勝国に転身したため、日本を始めとする外国勢力を排除するナショナリズムも空前の勢いで高まっていた。

上海にある東亜同文書院の日本人学生らは、自らの足で中国全土を踏破し、体験記を書いた（「中国調査旅行記録」もしくは単に「旅行記」と呼ばれる）。これは簡潔な表現で激変の時代における中国の実態を記録した貴重な証明資料となっている。

本稿では、愛知大学藤田佳久編著『中国を歩く 東亜同文書院・中国調査旅行記録』（注1）を基礎資料として用い、当時の日本人学生が、中国各地での体験を通じて記録した中国社会の実態を概観していく。その中で、当時の各階層の中国人の対日観、中国社会構造の変動、そして日本人学生らの対中観を分析し、五四文化革命期の日中交流の特徴を把握することを試みたい。

第一章 中国人との面会に見られる、中国人各階層の日本認知度の違い

「中国調査旅行記録」（以下「旅行記」と呼ぶ）の中には、中国人と実際に話す場面が多く出てくる。敵意と友好、理性と盲目など、相反する要素を彼らの会話から読み取ることができる。旅大返還、経済断交というスローガンの下で反日運動が盛んであった当時、日中両民族が実際に対話をすれば、当然このようになったはずである。ここで、六つの典型的な面会の記録を選んで、中国人の各階層における日本認知度を検討してみたい。

第一節 京漢、京奉沿線企業貿易調査旅行日誌（一九二三年） 老軍人談

六月二十八日、曇 小雨（中略）車中、孫某ト云フ一老軍人ト知己ニナリ、日支国交問題ニ付互ヒニ意見ヲ交換シタ。ソノ軍人ガ言フニハ「日本ハ支那ニ旅順、大連ヲ返還セネバナラヌ。ソウスレバ日本ト支那トハ永久ニ一体トナルコトガ出来ル。日本ガ旅大ヲ返還セバ支那ハ全国土ヲ捧ゲテ日本ニ従ヒ得ルノdeal。ソウスレバ、四海皆楽天下泰平ダト」ト。スルト、之ヲ傍ラニ聴イテ居タ弁髪ノ老人ハ「中国ノ国土ヲ日本ニ捧ゲル等ト言フ奴ハ売国奴ダ」トブン々々憤慨スル。是等ヲ聞イテ居タ四囲の支那人ハ何レモ下層階級ノモノラシイ風ヲシテイルガ、皆盛ンニ旅大問題ヲ論ジ、彼ノ老軍人ニ詰問スル（七四頁）。

この記述から見ると、孫という老軍人の日中関係についての考え方は、当時一般の中国人の考え方に比べ、一種独特であるように思われる。少なくとも二つの思想に通じている。一つは中国古来の文化同化主義である。古代中国大陸には、多くの民族がいて、戦いが続いていた。これについて、服部（一九二六）は次のように述べている。

異民族の間に国したる小さな民族が能くよく足を展ばして悉く異民族を従って、支那全土に勢力を振ふに至つた其発展の方針と言ふものは、武力を以て異民族を討伐征服するにあつたか、或いは然らざるかといふことを調べて見ると、支那民族は初めより武力を用いて征服する方針を執らずして、文化の力を以て他の民族を同化して発展の前路を開くという方針を以て進んで来たものと思ふ（服部、一九二六、三三頁）。

漢民族は優れた文明を持っていた。現在でも使用している漢字や、研究に研究を重ねてすでに中国人の血肉と化した儒教の思想などがある。古代中国においては、刀、矛などの兵器を用いる代わりに、漢民族の道徳基準、思考方式で他民族を同化させる形で支配を確立しようとした。その結果として広大な漢字文化圏ができたのである。

中国延々数千年の歴史上、王朝は頻繁に交代し、戦争、内乱が絶えず起っていたが、それでも巨大な中華帝国の版図を維持できたのは、こうした理由による。清までの中国五千年の歴史は、広い領土を持つ中国の漢民族の支配者が、右武政策から、右文政策に転換する歴史だと言えるだろう。盛世の唐時代まで、中国史には、始皇帝、漢武帝、唐太宗など、強い軍事力を持っていた皇帝は枚挙にいとまがない。しかし、唐代から、儒家思想など修養を重視する科挙という人材選抜制度の実施によって、国全体が右文に転換した。軍事力も次第に弱くなってきた。宋代になると、異民族の脅威が相次いで感じられるようになる。金、遼など北方の民族は、文化的には宋より遅れていたが、軍事的には宋をよく脅していた。これに対し、文化同化を信じていた宋の支配者は前代未聞の懐柔政策を選んだのである。すなわち、澶淵之盟という宋金両国の協議を結んでから、朝貢体制の中心国としての宋が、逆に金に毎年「歳幣」のお金を送り始めたのであった。武略を研究せず、文道の力に頼った結果、数年後の戦争により都が陥落し、書道と絵画で高く評価される宋の文人皇帝徽宗親子は金の捕虜になり、北宋は滅亡した。

また、清の例を見てみよう。面白いのは、清帝国の支配者満民族が、前述の北宋を滅亡させた金の子孫であることである。十七世紀半ば、異民族の清は、明の内乱を利用し、明に侵入した。強い戦闘力を持っている清の軍隊は万里の長城を越え、最後に明の版図を含んで、中国歴史上最も広大な領土を得た。しかし、満民族は中国を支配し始めて以後、弁

髮制度を除いて、すべて明の体制をそのまま実行していた。文化同化主義思想を受け入れ、軽武主義という前車の轍を踏んだ。一九世紀、太平天国の乱の際、かつて戦争の切り札であった満民族の勇ましい八旗軍が、すでに戦闘力を失っていたために、鎮圧できなかった。結局、曾国藩、李鴻章の漢民族の湘軍と淮軍によって、太平天国は鎮圧された。更に、一八四〇年、アヘン戦争が起こり、欧州列強の脅威が絶えず清を脅かした。古来の文化同化主義はその時も対外妥協主義という形で生かされることになった。敗戦後、最初に行われた土地割譲などの弁償は、蛮夷と思われる列強の野望を満たすものではなく、逆に、列強の利益強要の野望を強めることとなり、清帝国の災難は更に甚大になっていったのである。

孫軍人の考え方は、もうひとつ当時の重要な思想にも通じていた。所謂大アジア主義である。大アジア主義について、今日ではさまざまな論議が出ている。日本側から見ると、アジア主義は明治に入り、一九四五年の終戦まで、いくつかの段階があったとされている。王屏によると、「アジア諸国が平等に協力する古典アジア主義（アジア連帯論）、拡張アジア主義（大アジア主義）、侵略アジア主義（大東亜共栄圏）など三つの分類となり、「興亜」から「侵亜」へ質的な変化を遂げた」という（王屏、二〇〇四）。明治一八年（一八八五年）に樽井藤吉は、日、清、韓東洋三国の人々のために、漢文で「東亜合邦論」を書いた。「東亜合邦論」とは、日本は朝鮮と一体になり、新しい国名「大東」とし、清と協力（合縦）して、東洋の平和に努め、西洋列強の侵略を防ごうというものである。しかし、「東亜合邦論」ができた直後、日清戦争が爆発、日露戦争、第一次世界大戦を経て、日本国内で、軍国主義が台頭し、アジア主義思想はいくつかの流派を生み、最終的に侵略思想に変質したのである。

但し、いわゆる「アジア主義」への賛同者は日本のみではなく、アジア諸国にも大きな影響があったことを指摘しておかなければならない。「東亜合邦論」が書かれたのと同じころ、ハワイのダルマバーラは、アメリカ勢力のハワイ王国への侵入による亡国の危機を痛感して、日本、中国、インドを歴訪し、アジア諸国の連合を力説した。中国革命の国父と尊敬されている孫文も、有名なアジア主義者であった。先に引用した孫軍人との対話は一九二三年の出来事であったが、その翌年の一二月二八日、孫文は、日本の神戸高等女学校で「大アジア主義」という講演をしている（孫文が亡くなる四ヶ月前である）。この講演は、東洋文化の力、及び、東洋諸国の協力と復興を強調したものであった。なお、「日本は西洋覇道の鷹犬になるか、あるいは、東洋王道の干城になるのか」と問いかけて、日本人々にアジア主義への支持を求めた。

しかし、老軍人孫某の発言に、列車のほとんどの中国人は反対し、売国奴と罵った。一九二三年の中国は、既にもう強漢盛唐の時の中国ではなく、軍閥内乱、列強侵入の歴史上最も貧弱な時代にあった。古来の宗主国の立場に立ち、対外融和、文化同化を目指す平和主義には、実際的な意義が見出せなくなっていた。そして、中国の旅順、大連を占拠し、対中二十一か条を提出し、青島の主権を強奪した日本に対して、アジア主義の意味を含む対日友好、日中一体の思想を持つことは、中国のインテリ階層以外の人々にとっては、痴人の戯言のようなことだったろう。なんといっても、排日運動が中国全土で発生しており、ナショナリズムが強まっている五四文化革命時期においては、老軍人孫某の発言は、非常に珍しいものであったに違いない。

第二節 「秦隴南路調査旅行日誌」(一九二五年) 日本人学生、英米人に誤認される
六月十七日 晴、扶風 岐山(中略)町端レニ一戸麵屋ガアルノヲ見付ケテ昼飯ヲ取
ツタガ、満腹ノ為昼寝ヲスル。眼ヲ開ケバ周囲黒山ノ様ニ支那人ガ集ッテヱルノデ、
素破何事カト一人に問ヘバ「オ国ハ何処」と問フ。日本人ト答ヘテモ本当ニシナイ。
ソシテ曰ク、「日本人ハ背ガ低イ。閣下ハ英国人カ米国人カデアラウ」ト。閣下ト呼バ
レタコトモ、英国人に間違ヘラレタコトモ、生マレテカラ初メテダト独リデ苦笑シテ
イルト向フカラハトKトガ起キテ来タ。一行中デモ一番背ノ低イ彼等ヲ見ツケルト、
「アノ人達ハ日本人ニ相違ナイ」ダト。日本人ハ唯デモ小サイモノダト決メテヱルラ
シイ(五二八頁)。

中国の近代史上、『海国図誌』を書き、「外夷の特技を学び、外夷を制する」ことを戦略的な思想として提唱した魏源らはいたが、外国人に対し歪んだイメージを持つ話が多くあった。イギリスからの使者は、清の乾隆帝に拝謁する時、清の礼儀により三叩九拜(お辞儀三回、土下座九回)の礼をしなければならない。しかし、イギリスの使者はこれを拒否して、乾隆帝は怒った。傍にいたある大臣は、西洋人は膝のところに骨がなく、土下座ができないと説明した。

また、清の学者、ヨ正葵は西洋人に関して、次のように述べている。

「中土人心十竅、彼土人四竅。中土人鞏丸二、彼土人四」

(中国人の心臓に竅は十ヶ所があり、西洋人は四箇所しかない、中国人には鞏丸が二個あるが、西洋人には四個がある)(程、一九六九)。

日本人学生が訪ねた扶風県、岐山県とも、中国陝西省の関中平野西部、省都の西安から

それぞれ一〇キロ、一二五キロの所にある。長い歴史を持ち、古来の交通の要衝である当地の人は、この二つの例と比べると、まだ一日の長があると言えるだろう。

しかし、黒山のように人が集まっているという記述からわかるように、地元の人々は滅多に外国人と会うことはないものと思われる。外国の人に強い好奇心を持ち、外国人に友好の情を感じていて、二〇代の日本人学生を「閣下」と呼んだのである。日本人学生には「生まれてから、はじめて」という感慨があった。なぜこのような感慨があったのかといえ、当時の中国の情勢は、一九一五年の反二十一か条運動、一九一九年の五四運動以来、民間で日本製品ボイコットや、反日デモなどの運動が長いこと続いていたからである。そして、この日記が書かれた日付より一八日前の五月三〇日、上海で、英国巡捕が中国人を射殺するという事件が起こっていた。即ち五・三〇事件である。反英、反日、反帝国主義の排外運動は、頂点を迎えていた。

直二駅付近茶館二正スニ、附近ノ苦力、黄包車、小車等其他一般無頼子数百名、白眼ヲ以ッテ群衆シ来リ一種ノ凄気茶館に満ツ。コノ際、万一主謀者乃至扇動者輩出センカ、余等ノ運命誠ニ厚卵ノ夫レ以上ノモノガアッタデアロウ。巡警歩哨数人家ノ前後ヲ警戒シ、制スレドモ毫モ解散ノ様子ナシ（「広東広西調査旅行日誌」一九二五年、六六六 六六七頁）

朝から支那人が黒山の様に押しかけて来たので目が覚めた。部屋を出て不図見ると、あたりの壁中に「日本人に宿を貸さず」、「日英と経済断行」、「日本人と言葉を交うる可からず」、「日人中国の奥地を探る」等の宣伝ビラが一晩中に無数に貼りつけてある。顔を洗う暇もなく、宿の老爺が青くなって飛び込んで来た。「直ぐ出て行って呉れ」と云う。どうしたんだと聞いても要領を得ない。「何でも良いから直ぐ出て行け」、「馬鹿な事を云うな、吾々は朝飯も食っていないし荷物もある。馬がなくては出て行けない」、「いや朝ご飯は食わず事は出来ぬ」と漸く出来かけた粟粥を竈から下ろしてしまう。その内に喇叭太鼓を先頭に囃し立てながら、学生の威行列は宿に着いた。約三百、一名の団長は屋根の上に立って、支那式の熱弁を奮って群衆を扇動する。群衆はその度に勇を得てワッワッと扉を押し寄せる。危険は刻一刻と迫った。

警察も昨夜の様な工合（ママ）では頼みにならないし、此の上は屈辱を忍んでこの町を去るより外方法がない。馬もない事だから各自荷物を背負わねばならぬ。出来るだけ荷物を軽くするために、必需品を残して全部廃棄した（「山西陝西黄河流域調査旅

行日誌」一九二五年、五八六 五八七頁)

これはもう二つの調査班の班員が、ほぼ同じ頃に述べた当時の中国各地での反日状況である。調査班の班員たちが宿泊地から追放され、反日団体に囲まれ、危険な境地に陥ったという記述が無数にある。中国での排外運動は燃え盛る炎のように展開していたのである。これに対して、扶風、岐山の田舎で生活している人たちは、外国からの人々を純朴な気持ちと好奇心で迎えていたのであり、反日運動などの政治活動への関心は低かったのである。

この記述から推測するに、調査団の日本人学生たちは、この町に入った初めての外国人だったのではないだろうか。それまでに、地元の人々は、「日本人は背が低い、西洋人は背が高い」という情報しか持っていなかったから、偶然背が高い日本人と会い、疑いを生じ、日本人学生たちをイギリス人、アメリカ人と間違えたのである。魏源の「外夷の特技を学び、外夷を制する」という思想が提出されてから七〇年、アジア最初の共和国である中華民国が建国してから一三年、民主運動の五四運動が始まってから六年が経ったが、中国の広大な奥地で生活している人たちの外国に対する認識は、まだまだ乏しいものだったのだろう。但し、外国に対する認識が乏しく、外で起こっている猛烈な反日運動を知らなくとも、純朴な奥地の田舎で、調査団の学生たちを友好的に処遇したことの意義は大きい。

第三節 隅々に存在していた反日感情 名妓の着物引き裂き・小学生の排外デモ

その客庁にあった一つ支那新聞に次のような文句が書いてあった。「某茶楼に一美妓あり。同夜日本服を穿つ、坐りにある客憤る。その妓直ちに日本服を脱して、これを片々に引き裂く。同坐の客これを見、愛国心の発露なりとして称賛す」と(「中北支鉄道沿線転運業倉庫業調査旅行日誌」一九二三年、二六頁)。

六月十五日 月曜(晴)(中略)

午後学生団の排外運動の宣伝があった。小学生、高等小学生約三百、御苦労様にごの熱い画間町を練り歩いて、『打倒帝国主義』『収回租界』など、引率の教師の発言で合唱する。何の事か彼等小学生には自分のやっている事が分かるまい。ハタ、タコを習っている位の子供だもの(「山西陝西黄河流域調査旅行日誌」一九二五年、五七二頁)。

「旅行記」の中で、中国人の反日運動に関する記述は非常に多い。しかし、なによりもこの部分は読む人に最も衝撃を与えるものである。当時において、中国の反日運動、日本排外運動が全民参加というのは、決して誇張ではない。社会で最も地位が低い人や、最も

若い人も反日の列に入っていたのである。

日清戦争の時、中国で次のような話があった。当時アジア一の誇りを持っている清国の北洋艦隊に対して、日本の子供たちは遊びの時も、北洋艦隊の名艦の「定遠」「致遠」を殲滅しろというゲームをしていたという。この話が本当かどうか、今まで日本の資料により証明できていないが、今の中国の学者たちは日清戦争失敗の原因に言及する際、常にこの話を引用する。調査団の団員たちは中国各地で宿泊をさせてもらえず、靴などの日用品を買わせてもらえず、反日デモ隊に囲まれ、追われ、石で殴られるなど、実にさまざまな体験をしたために、痛切に中国人の反日感情を実感したに違いない。「何の事が彼等小学生には自分のやっている事がわかるまい。ハタ、タコを習っている位の子供だもの」という一節からは、筆者の少し軽蔑的な否定的な感情が読み取れる。しかし、このハタ、タコを習っている位の子供たちが、その後の日中戦争を経て、更に現代の日中関係に大きな影響を与えたことを考えれば、これは決して一笑に付すことのできる話ではない。ハタ、タコを習っている位の子供も反日運動に参加させられたことから見れば、現在、日中関係が悪化していることは、決して単にある政府、ある政党のせいにはできるものではなく、歴史的な原因のあるものであると考えなければならない。それを研究することが今日の日中関係を考える上で不可欠のことであると考え。

第四節 中国知識人たちの対日感情

一、唐汝南氏からの贈詩

唐汝南先生が一句を読んで名刺の裏に認めて渡すを見れば、コンナ詩である。

衝州送別日本大国民七言絶句一首

緑苔相敘未多時 我恨交情事太遅 (注2)年五十四歩(ママ) 不能諸君遂其
遊歴去 異日衝陽聞雁候 即堪重護送彷彿

何れ俺等と別れねばならぬのが残念だと云うのに間違はないから、好々と賞めてやれば、又得意になって次の様な冠踏詩を示した。

磯田留治先生止謬

磯受磨礪器自成 田園久棄出東京 留青垂後光竹帛 沿国高才冠世英

蜜蜂の啼声みた様な声を出してウンウンと鼻の先で唱いながらコンナ詩をデッチ上げた。俺の名前を読込んだのである。巧拙いは判らぬが、その心根は免じて亦好好と賞めてやった(「南支調査旅行日誌」一九二五年、七〇九頁)。

唐氏は中国の知識人であり、当時の激しい反日運動の中にあっては、その影響を蒙ることのない、珍しい存在であった。前述のように、教師のような知識人であっても、小学生を連れ、反日デモに参加していた時代である。ところが、唐氏の作った漢詩には、当時の政治的な影響は認められず、むしろ若い日本人学生たちの勇気と探究心を褒め、友好的な気持ちを抱いていることが読み取れる。特に、「我恨交情事太遅」及び次の「年を取ったから、いっしょに遊歴に行けない」という一節から、当時五四歳の唐氏が東亜同文書院の学生たちにかかなりの親近感を持ち、「仲々愛嬌」を振りまいていたことがわかるのである。

二、劉さんと日本人の奥さん

長々御厄介ニナツタ劉サンノ家ヲ出ル。奥サンガ氣ノセイカ元氣ナイ顔シテイラレタ。“皆サンガ行ッテ了フト……又久市区はシクハ日本ノ人ニ会エマセン”ト云ハレル。ナゼ……ト言ヒタイ程寂シカッタ。

西安ニ八支那人ノ奥サンニナツテ来テイル日本ノ女ノ人ハ、マダ五人位西安ニイルソウダ。(中略)

昨夜劉サンガ、汽車公司ノ社長ノ温偉ト云フ人ト督軍軍医課長ノ楊鶴愛先生ヲ案内シテ呉レラレタ。温サンハ名刺ニ日本高等工業電気科学課畢生トシテアル程、迎モ日本人趣味ノ人デ而モ流暢ナ日本語デ話サレル。ソレデ西安デタッター人見タ処ノ、背広ニ白靴ノハイカラスタイルノ人ダッタ。一昨年卒業セラレタソーナ。楊サンハ、千葉医專出ノ温和シイ人、奥サンハ千葉ノ人(「江河文物比較調査旅行日誌」一九二三年、一八五頁)。

劉さん、温さん、楊さんは、二〇世紀の始めから始まった日本留学ブームを代表する典型的な例である。それぞれ日本人女性と結婚したいいわゆる国際結婚の人々であり、日本人に優しくするのも当然のことといえる。そして、当時の西安で日本人妻が五人位もいるというのは、日中民間交流がある程度盛んであったことの証しといえるだろう。今日ほどの日中間の激しい生活レベル差は存在していないため、日中間の婚姻も当時は多かったのである。しかし、次のような例も見られる。

三、伎山県の知事

…流暢ナ日本語デ挨拶サレテ(中略)氏(伎山県の知事のこと、引用者注)ハ早稻田ノ出身ノ由、卒業シテカラ六年ニナルト云フノニ、トテモ流暢ナ日本語デ世間ヲ論ジ、

抱負ヲ語ル。果テハ日本ノ対支政策ヲ難ジ、軍閥ノ勢力ヲ呪ヒ、袖ヲ捲リ腕ヲ叩イテ報復ノ日来ルベシト云フ様ナ事ヲ弁ジ立テル。ソナニ日本ノ悪口ヲ云フカト思フ（「秦隴南路調査旅行日誌」一九二五年、五二九頁）。

伎山県の知事は中国の知日派といえるだろう。しかし、日本の対中政策に非常に不満を持っていた。ただ「袖ヲ捲リ腕ヲ叩イテ」という記述の後、細川侯爵の世話になったことをどうしても忘れられないという話も出てくる。すなわち彼は、日本人に恩義を感じている一方で、当時の高圧的な日本政府の外交政策に反感を覚えていたのであり、複雑な気持ちを抱えていたものと思われる。

こうした相反する感情が共存するような状態は、今でも続いているのではないだろうか。日本に留学した経験を持つ中国人留学生には、ある特異な現象が見られる。中国ではよく「留米親米、留日反日」という。アメリカに留学に行くと、すぐにアメリカの政治体制に親近感を生じ、アメリカを模範にして中国の将来を想像する。ところが、日本に来た留学生は、中国文化から多くの恵みを受けた日本社会の進歩を感じることで、むしろ民族のプライドを強くし、自国の伝統文化の大切さへの理解を深めていくのである。もし、排外的な日本社会に接し、多少なりとも差別を受けるといったことが起きたならば、さまざまな違和感も出てくるに違いない。そうして、日中両国の不幸な歴史の記憶も加わって、反日感情をさらに募らせる結果となるのである。

例えば、靖国神社の前で落書きし、中国で釣魚島保衛運動のリーダーとして活動する馮錦華氏は、元は東洋大学の学生だったという。馮氏は中国のあるメディアのインタビューを受けた時、「日本で私は愛国の大切さを教えられた」と語っている。現在、日本政府が在学中の留学生に対して、奨学金、学費減免など優遇政策を採っているにもかかわらず、なぜこのようなことが起こるのであるのか。さまざまな見方があるが、文化的、歴史的な原因が多いのではないかと思われる。日清戦争以来、中国の文化人の間には、反日の土壌が存在してきたのである。

「旅行記」を参照すると、一九二五年の時点ですでに、日本に留学経験を持つ人さえ、日本に対し非常に反感を持っていたことがわかる。これに比べるなら、後の八年間の日中戦争を経て、反日土壌で育てられた中国の若者たちが、日本に対してより強く抵抗感を抱くのはやむを得ないことといえるのではないだろうか。

第五節 小結 「旅行記」から見た中国人の対日観

第一節から第三節の例においては、中国一般国民の対日観が記録されている。彼らの知識のレベルは非常に低く、世界のことをよく知らず、反日派が圧倒的に多かった。日中の協力関係の構築を主張する声は、すぐに厳しい歴史の現実を前にしてかき消されたのである。平民階層の反日言動は、単純であり、態度は過激であった。ほとんどの日本製品を排斥し、日本人へのサービス提供を拒否するなど、現実に行動を起こしていた。

これに対して、中国の知識人たちは、日本に対して、普通の国民よりもはるかに複雑な感情を持っていた。唐汝南氏は中国本土派の知識人といえるだろう。彼が日本人学生たちに友好的な態度を取っていた理由は、やはり日中間の文化的な親近感だろうと思われる。彼は得意な漢詩を書き、日本人学生に贈っているが、これはあたかも唐代の李白と阿部仲麻呂の付き合いのようである。

面白いことに、筆者も中国人留学生として、千葉県のある国際親善活動に参加した時、初めて面会したある新聞社の編集長から漢詩を贈られたことがある。詩のルールである押韻が十分には守られていなかったが、内容から日中友好を謳えた真意を感じる取ることができた。この意味で、日中の長い交流史の中で、偉大な漢文化が追い風の役割を果たしているといえるだろう。ただ残念なことに、漢文化の核、すなわち忠、孝、節、義は、近代に入ってから影響を弱めているのではないかと思われる。中国の知識人たちは自国の利益に配慮し、自国の尊厳を一般の人々より大切に考えていたはずである。かつて中華文化の受益者であった日本が、先進的な西洋文化を取り入れ、列強になり、中国からの利益獲得を画策する姿を見せるに及んで、中国の知識人たちは、これを中華文化の倫理観への裏切りと思い、一般の国民よりも一層強い憤慨の声をを出していたのである。

第二章 日本人学生の中国認識に関して

東亜同文書院の日本人学生が中国全土で調査を行った時期というのは、中国が政治的に不安定な時期であった。日本人学生は調査すると同時に、地元のさまざまな中国人と交流したが、時には、自分たちが以前より持っていた中国人に対する認識を活用することで、緊急の事態に対応しなければならないこともあった。彼らの認めた旅行記に、二〇年代前半の日本の青年の対中観、さらには、民族観を覗くことができるものと思われる。

第一節 中国文化への強烈な興味

調査班の学生たちは一つの都市に行くと、必ず地元の名所旧跡を訪ね、そして、名所旧

跡に関する逸話を多く書いている。特に南京、西安、北京などの古都で名所を調査し、中国の記録に比べても遜色のない調査記録を書いている。

例えば、南京の明の故宮、皇陵の損壊過程を詳しく調べて書いている。陝西省の武王陵、泰山の孔廟など全体図を書き、あるいは写真を撮り、記録している。西安郊外の仏教名地の小雁塔は、当時軍隊に占拠されていた。大学生たちは、小雁塔を見物するために名刺を渡して交渉を試みているが、結局断られ、残念で不愉快な気持ちになったという(「秦隴北路調査旅行日記」一九二五年)。

第二節 強い民族プライドとナショナリズムを含む中国認識

孔廟の英傑像

ソレカラ孔廟ニ行ク。南京デ見タヨリモ何処デ見タヨリモ大キイ。ソシテカ可ナリニ古イモノダッタ。多分漢時代ニ造ッタモノダラウ。中ニ図書館ヤ初級学校ガアル。閲覧室ノ壁ニ泰西古今ノ英傑偉碩ノ肖像ガ貼ッテアッタ。日本人ノハーツモナイ A ガ憤慨シテイタ(「江河文物比較調査旅行日誌」一九二三年、一七二頁)。

日本国歌が奏された時

芳沢公使ヲ迎フル支那軍隊ノ楽手、日本国歌ヲ奏ス。然ルニ船中誰一人脱帽シテ之レニ心和スルモノナシ。癩ニ触ルコト甚シ。嗚呼国家ヲ祝福スル国歌ニ対シテ礼ヲ知ラザル輩ハ哀シムベキ哉(「中北支鉄道沿線転運業倉庫業調査旅行日誌」一九二三年、五〇頁)。

日清戦争からわずか三〇年しか経っていない当時において、日本の若者たちの、祖国に対する気持ちは当時の日本の国力と同じように強かった。前者の例は、中国の伝統的な、いわゆる「中華思想」と関連していると思われるが、当時の反日の政治ムードとも関係があるだろう。後者の例は、二つの立場から解釈することができる。癩という表現は日本人学生の気持ちを的確に表したものと見える。日本人学生の立場から見れば、長年の皇国思想教育を受けた者として、神聖な「君が代」を演奏する時に、誰一人中国人が立たず、脱帽もしないという行為に憤慨したのもあたりまえのことといえる。しかし、船に同乗していた中国人の中に、そもそも「君が代」を知っている人が一体何人いたのだろうか。二〇年代の中国では内戦が止まず、国民の教育レベルはかなり低かったものと思われる。中国の国歌さえも知らない人が多くいたといわれている。もっとも、日本の国歌だと知ってい

たとしても、反日感情によって、軽蔑的な行為をする人もいたかもしれない。二〇〇四年に中国で開催されたサッカーアジアカップの決勝戦において、多くの中国人が、「君が代」の演奏された時、立たなかった。この件は日本国内で大変な騒ぎとなった。もし演奏されたのが中国の国歌で、日本人が起立しないということであったなら、反応はより弱いだらう。いずれにしても、国に対する強烈な愛情がなければ、決して憤慨するということはないのである。

第三節 欧米列強との競争心

書院の学生たちは、中国を旅する中で、世界各国からの人とも会っている。それぞれの国の人に対する感情は、歴史的な背景の影響を受けているようである。

先ず一〇年前に負かした敵国のロシア人に対しては、軽蔑的な態度を示している。当時学生たちが会ったロシア人とは、ロシア国内で共産主義革命の十月革命により、元の特権と地位を失い、中国に亡命に来た所謂「白党」である。学生たちは次のように「白党」たちの生活を描いている。

モット生活が切迫して乞食などもウヨウヨしているものと考えていた。乞食をしていた露人は二、三箇所で見撃した丈である。尤も馬車の御者をし

ているものも少いではないが(以下省略)(「北満及国境調査日誌」一九二五年、四二六頁)。

欧米の勢力に対しては、強い警戒心を持っていた。西安で米孚石油など企業が進出したのを見て、日本の利益を守る意識が強くなったものと思われる。なお、福州における日本と欧米列強との在中利益分配に関して、次のような考えを述べている。

福州二来テ驚クノハ外人ノ勢力ガ、元来福建省ハ我国ノ勢力範囲トシテ諸外国ニ対シテ支那ニ不割譲ヲ約定セシメタ重要ナル地方デアルノニ不拘、二、三ノ商館アルノミデ、何等此等福建省民ヲ善導スベキ施設モナイ(中略)コレニ反シテ米、英、仏ハソノ勢力ハ日ニ増シテ彼等ハ盛ンニ学校ヲ建テ、省民ヲ善導シテオル。(中略)我々ノ期待シテ行ッタ福州ハ全然裏切ラレテシマッタ。コンナ状況デ進ンデ行タラ、恐ラク福建ハ数十年ノ後ニハ英、米人ノ手中ニ入ルノハ当然デアラウ思ハレル(「南支沿岸産業貿易調査旅行日誌」一九二三年、三六六 三六七頁)。

そして、福建での勢力維持の方法については次のように述べている。

将来英米諸国ト相並ンデ吾国力ノ発展ヲ期セントスルニハ、ドウシテモ支那ヲシテ導

クニ文化的ヲヨツテシナクテハナラヌ。即チ支那ノ人民ヲ善導教化シ、彼等ニ安固ナル生活ヲ与ヘ、以テ根底カラ勢力ヲ樹立シナケレバ駄目ダ。尤モ貧乏国ノ我国トシテハ、多少財政上ノ問題モ顧慮セラルノ点モアルノダロフガ、然シ軍ニオ金ガナイト云ツテ捨テテ置クワケニハ行カナイノダ(「南支沿岸産業貿易調査旅行日誌」一九二三年、三六七頁)。

二〇代の青年として、この観点は非常に驚くべきものといえるだろう。このような卓越した洞察力を身につけさせるということが、あるいは東亜同文書院設立の目的なのだろうか。中国とは異なる政治的立場からの発言だが、少なくとも文化の同化の大切さを認識し、文化の力を生かし、英米の勢力を排斥して、自国の利益を確保しようとする考え方は、当時としては珍しく、かなり優れたものといえるのではないだろうか。

第四節 近代中国人の国民性への批判

当時の若い日本人学生らの言動は、実はある意味では日本人の対中観と繋がっているといえる。当時の学生たちが中国を批判した面について、整理してみると次のようになる。

一、公德心の欠如

支那人ノ通有性カ知ランガ、公德心ノ発露トモ見ルベキ些ノ温情モ認メラレヌ。大ノ男七人が全ク十数日ノ旅行ニ心身モ自己ノ所有トモ思ハレヌ程モ疲労シキツテオル。讓座ト言ツテモ聞キ入レサウニモ見エズ、ソノ上ニ支那独特ノ臭味ハ遠慮ナク吾人ノ五感ヲ透シテ自身ノ一部ヲ構成スルカノ如クニ感ジラレタ(「京漢、京奉沿線企業貿易調査旅行日記」一九二三年、六五頁)。

…支那人の息と汗の臭み蒸し暑くてまるで豚小屋だ。横柄な支那人の態度、支那人は豚だと誰か云った。実に然り、礼儀も何もない豚だ。二人分の席をとっていて、譲って呉れない(「山西陝西黄河流域調査旅行日誌」一九二五年、五四九頁)。

二、活気の欠如

楽平の町は死んである。そして楽安江は死の河だ。黄浦江の船舶の輻奏を見なれた眼には、この町の河の流れは如何にも情ないやうに思へ、小便と豚との臭気で暮して行く支那人が一面不思議にも見え、一面可哀想にも思はれる。斯した環境に置かれたは人間は只食って寝て暮していく燐れな動物に過ぎずして、何等の刺激もなければ従っ

て又何等の澁刺たる処もない。新聞も半月位は遅れるのだ。人の頭もそれ丈世間から後れて行くのだ。こんな処に一年とあたら、それこそ若年寄になって骨の抜けた人間になり終つて了ふ事であろう(「江西、湖南工業調査旅行日誌」一九二三年、三二二頁)。

三、女尊男卑

日ニ焼ケテ色黒ノ女連ガ跣足デ船モ漕ゲバ、荷物モカツグ。福州ハ一般ニ女ハ野外ノ労働ニ従事シ、男子ハ家内ニアツテ厨房ヲ司ルコトヲ事トシテオルノ結果、自然女尊男卑タルラザルヲ得ナイノデアル。此種ノ女ハ頭髮ニ剣状ノ長簪ヲ三本指シ、耳朵ニ八大ナ真鍮ノ耳環ヲ嵌メ、跣足デ大道ヲ濶歩スル姿ハ誠ニ勇々マシイモノデアル(「南支沿岸産業貿易調査旅行日記」一九二三年、三六六頁)。

四、残忍性

原は支那人をよって満つ、銃の発せらるの毎に見物人一同声を合わせて拍手し喜ぶ。此れ実に支那人の残忍性を最も示すものになりと信ず。(「秦隴北路調旅行日記」一九二五年、六三〇頁)

以上の四点の他にも様々な批判があるが、大きくこの四点に絞って分析してみることにはしたい。

今日感覚から見ても、「一、中国人の公德心」に対する日本人学生の批判はその通りであろう。今の中国人の公德心は八〇年前と比べて大きな変化はない。風呂に入るのが好きな日本人にとって、中国人の体から出てきた匂いはおそらく我慢のならないものだろう。これに対し、公共の乗り物おいて座を譲ろうとしない風潮については、むしろ現在の日本を見るようである。今後、教育によって変わっていくものかもしれないが、席を占めている若者が、立っている年寄りを前にしても、知らない振りするという場面を日本では多く見かける。もっとも、中高年の女性に席を譲るのは、相手が逆に嬉しく感じないという話もある。「一、中国人の公德心」の記述と照らし合わせて考えるなら、日本はこの八〇年の間に、公德心に対して、社会的な意味が変わったのではないかと思われてくることだろう。

「二、活気の欠如」に関してわかることは、当時二〇代の学生らにとっては、中国の田舎に住んでいる人々の生き甲斐について想像することは、大変難しいことだったのではないかということである。この学生らの眼には、田舎の中国人は、哀れな動物、骨の抜けた人間と映る。こうした記述から、当時の日本人学生が、強い優越感を持っていたことがわ

かる。これは当時の新興国家国民としての日本人の典型的対中認識と思われる。こうした優越感から、後に起こる様々な大事件が生じてくるのであろう。

「三、女尊男卑」は、男性中心の日本社会からきた男子学生たちにとって、これも滑稽千万の話であると思われる。当時の福州で、男性は家内にあり、女性は外で働くというのは、事実なのか、それとも市井間の噂なのか、信憑性について討論する余地がまだ残されているものと思われる。ただ、事実と認められていたのは、当時の中国の女性は、日本の女性より強いということだ。儒教思想を教育理念とした東亜同文学院の学生たちにとって、これは儒教の「三従」(女性は未婚の時父に従い、結婚した後は夫に従い、夫が亡くなった後は息子に従うという儒教教義)と矛盾し、中国伝統文化と現実社会とは異なるのだと実感したに違いない。

「四、残忍性」については、この記述程度では、中国人の残忍性を示すにはあまりにも無力であると思われる。むしろ、銃の発射を見物する人たちの拍手に中国人の残忍性を感じ取るという感覚の中にこそ、一九二三年当時の日本人における対中国観、敵意が伺えると言ってよいのではないだろうか。

第五節 小結 日本人学生の人生を変えた中国体験

日本人学生たちは二つの中国像をもっていたと言えるだろう。雄大な中国伝統文化を尊重するとともに、現実の中国を厳しく批判している。これは現在でも変わっていないだろう。当時欧米政治体制を導入したばかりの中国で、ナショナリズムが高揚しつつある現実に対して、同様に高い民族プライドを持っていた日本人学生たちは、日中関係の板挟みとなって調査を実施し、中国民衆のさまざまな反日感情を実感した上で、日中関係の行く末を考えたことだろう。そのとき、過酷な調査活動を通じ、積んだ経験が彼らの中国認識のみではなく、人生観にも大きいな影響したと思われる。卒業後、それぞれ違う人生の道を取り、日本の軍隊に入り、中国を熟知しているという有利面を生かし、後の侵略戦争に貢献した人もいた。それとは反対に、中国の運命に同情し、反戦同盟などの組織に参加した中西功のような学生もいた。そして、戦後の長い間、中国に対する親近感を持ち、日中関係の改善に努力を注いでいる卒業生も多くいることだろう。

第三章 「旅行記」から見た二〇年代中国社会の变革と階級関係

一九二三年から二五年頃、中国数千年の封建社会が終わってから一〇年余り、新文化推

進運動の五四運動から数年という時期で、中国社会には前代未聞の変化が出てきていた。また、清王朝の滅亡によって、かつての中央集権力は弱くなり、共和民主の夢は泡となり、中国全土は事実上の内戦状態にあった。

当時の日本人学生たちの記録から、中国社会の緩慢な変化を読みとることができるだろう。「江西湖南工業調査旅行日誌」の中に、学生と南昌警務処稽査員（ママ）との対話が載っている（二九七頁）。稽査員（ママ）は自分の低い給料、生活の負担が重いこと、日本への憧れ、さらに文明世界への展望など、さまざまなことを話している。特に最後の文明の交流に関する話から、一人の中国政府の係員としての彼が、当時の新文化運動に対して抱いていた情熱、及び外の世界としての日本に対する大変な興味を感じとることができる。そして、このほかにも、教育の振興、鉄道の整備など多様な話題が話し合われていたことが伺える。

しかし、この新文化運動の裏で、民衆の蒙った軍閥内戦の苦しみも深刻だった。一九二五年の「南支調査旅行日誌」には、広東兵と広東の平民が、敗れて武装解除した雲南兵に対し、略奪と虐殺を行った風景が描かれている。

ポケットは云うに及ばず、上衣を脱がせられ袴下を下ろし、靴の中まで検べられる。真裸体にされても（中略）殺気立った広東兵は当るを幸い殴り巡っているのである。少しでも抵抗の気持ちがある者は、最後に早速銃殺だ。仕方泣く泣く（ママ）殴られ抜いてヨロヨロになったものは河中に叩き込まれる。鉄砲の台尻で思い切り殴られて一息にカッと血を吐いて路傍に倒れる奴もいる。（中略）苦力は生活の綱である担い竹を担ぎ出して、雲南兵と見れば、半殺しに殴り倒して容赦はない（南支調査旅行日誌、一九二五年、六九一 六九二頁）。

以上の二つの例は、実は、二〇年代中国の典型的な社会の現実である。数多くの知識人が、西洋の民主主義や科学の思想によって、衰えている中国を救えると思っていた。中国五千年の歴史上、最も謙虚に外国に学んだ時期といえる。だが、やがて、アジアで最初の民主共和国を建て、民主の思想が清帝国の主権支配に代わって中国を治め始めた時、何千年の集権支配に慣れてきた中国人各階層にとっては、民主共和制の支配力はあまりに弱いと感じられたのである。後に出た共産主義を含むさまざまな思想が空前の勢いで繁栄する一方、内戦という形の内部消耗にも直面しなければならなかったのは、こうした理由によるものと思われる。これはこの時代の中国の運命に関心を寄せていた人々にとって、極めて難しい政治命題であったことと思われる。

さて、中国社会には巨大な変化が起こっていたが、社会構造としての三角階級関係は、晩清時代と比べ、どのように変化したのであろうか。いわゆる「三角関係」とは即ち、「官は洋を恐れる、民は官を恐れる、洋は民を恐れる」という階級関係のことである。この三角の関係は清の末からの半封建、半植民地の中国社会特有の社会構造である。

第一節 洋と官の関係

「洋」は外国人である。当時は洋人と呼ばれていた。欧米からの人を西洋人と呼び、日本からの人を東洋人と呼んでいた。中国政府の列強との関係は、晩清時代よりほとんど変わっていない。一八四〇年のアヘン戦争以後、数十回の国土割譲、戦争賠償金の支払いを経て、中国は何千年にもわたって培ってきた中華思想の優越感を失ったのである。外国に対して、政府の官員らは、なるべくトラブルを避けるようにし、便宜を図ることを心がけるといふ複雑な感情を持っていた。例えば、当時上海東亜同文書院の二〇代の学生たちが容易に県知事と会うことができるのは、現代社会から見れば、かなり不思議なことといえるのではないだろうか。学生たちは中国政府の特別許可を持ち、どこに行っても、警察あるいは軍隊の保護を受けている。この頃から数年遡るなら、日本で関東大震災の時、泥棒の恐れがあるという口実で、数千人の在日朝鮮人と中国人が虐殺されたという事実がある。この意味で、当時中国の官員らは、五〇年の間に劇的に世界列強に入った日本、その日本から来た学生たちであるとして、さまざまなことに配慮していたのである。二〇代の学生らに優しくしたというより、彼らの祖国の威望を気にしたというべきであろう。

なお、学生たちの旅行記の中に、奉天軍の張宗昌が日本領事館と協力し、日系紡績会社のストライキを起こした労働者を鎮圧したということが書かれている。そのストライキは「上海に於ける紡績工場の罷工の騒ぎ」(「北満及国境調査旅行日誌」、一九二五年、四一六頁)。五四運動以来、中国の下層民衆の間でナショナリズムが高揚してくるにつれて、民衆と外国勢力との衝突が相次いで起こるようになる。だが、上層支配者としての政府は、利害を権衡し、よく外国勢力の立場に立ち、応援していた。これが後に政権の弱体化を促し、官民関係が緊張していく理由の一つになったものと思われる。

第二節 民と官の関係

晩清時代の「民は官を恐れる」という官民関係は、すでに全く過去のものとなっていた。もはや「民権時代」に入ったといえるだろう。これは民主思想の産物である。二〇年代か

ら三〇年代にかけての二〇年間、民衆が起こしたデモやストライキなどの数は、その後から今日に至るまでの七〇数年間より多かったのではないかといえる。一九一二年、アジア最初の民主共和国を立てたということは、数千年間維持されていた官階層の特権が、有史以来、初めて民衆からの理論上の挑戦を受けたということになるのである。民衆の言動の自由は、最大限に解放された。一方、政府の結束力も前の清時代より弱くなっていた。例えば、日本人の学生たちは、清源県で反日学生デモ隊に追われ、「巡官も来り、百方彼等をなだめんとせしも聞かず、且つ巡官らは学生等の前には頭あがらず、遂に事情の余儀なきを云ひ、厚く我等に陳謝して」(山西陝西黄河流域調査旅行日誌、一九二五年、六二一頁)。そして、後の学生らの県知事との面会も、反日学生の要求によってキャンセルされている。

ここに歴史的なユーモアを見ることが出来る。巡官は学生らの前で頭が上がりずにいるが、これは、当時忠君愛国の皇国思想教育を受けていた日本人学生たちにとっては、どれほど不思議なことであっただろう。その一方で、現代においては、共産主義集権制の下で生活している中国の人々が、日本で選挙の時、頭を下げて有権者たちに「よろしくお願ひします」と言っている候補者たちの姿を見たとしたら、やはり彼らも日本人学生らと同じような気持ちを抱くに違いない。

第三節 民と洋の関係

この時期の中国民衆と外国勢力との関係については、前述のように、ナショナリズムが強くなり、反日をはじめとする反帝国主義運動が盛んに起っていた時期であることを想起する必要がある。この運動は、小学生、売春婦でも参加した運動であり、運動の規模は全社会の各階層に及んでいるといえるだろう。日本人学生らがその時期に中国全土に旅行に行くということは、大変な勇気がなければできないことであつたと思われる。言論自由の時代に突入したばかりの中国の人々に出会うこととなつたために、旅行団は靴など日用品を買わせてもらえず、旅館に泊めてもらえず、デモ隊に囲まれたり、追われたりするなど、人身の安全が脅される場合も多かつたのである。当時の状態は、おそらく晩清時代の排外運動より、さらに盛んであつたものと思われる。晩清義和団運動の闘争の矛先は、主として西洋に向かつていた。宗教上、中国本土宗教を守るために、外国教会を破壊し、外国人宣教師を殺したケースも多かつた。これは八国連合軍が北京に侵攻したことが引き金になつた事件である。ただ、二〇年代に入ると、日本は排外闘争の的になつた。政治上から見れば、二十一か条の国恥記念日の設立闘争、五四運動の青島の主権をめぐる闘争など、日

中の関係は日清戦争以来、最も緊張した時期に入ったといえる。そして、経済の面から見れば、商人らは利益優先の立場から、反日運動に参加した。二〇年代の日本は、明治維新以後、日清、日露、第一次世界大戦の勝利を経て、経済力、技術力の格段の発展を遂げていた。日本製の商品が中国に殺到し、中国の産業に大きな打撃を与えていた。こうした背景があったために、「日本商品排斥」、「中日経済断固」などのスローガンを掲げることが、中国商人らにとって自らの利益を保護する手段となったのである。

第四章 一九二〇年代の日中両国青年における愛国観の比較

「清蜀経済調査旅行日誌」(一九二五年、七四一頁)の中に、貴陽州の省議会で行われた、日中両国の青年による、時局に対する議論が記録されている。時はまさしく、日本軍が上海で数人の中国人を銃殺した上海事件の直後である。強烈な反日のムードの中で、日本人学生の代表は、「遊暦(ママ)の目的と学校創立の宗旨」を述べた後、上海事件に対しては、「確報に接せざる故、何等の意見を述べることは出来ずとうまく逃げ、最後に復興垂細垂の問題に結びつけて降壇した」。一方、中国側の学生新聞記者らは「愛国を叫び、博愛平等を標榜して、資本家帝国主義を倒せと絶叫した」。これに対して、「旅行記」の筆者は「その云う所美しきも、其論旨論調に確たる根底なく、只漠然と斯く叫ぶのみにして、彼方の頭には帝国主義或は共和主義の何物たるやを知らず、唐突の言を弄して聴衆の笑に投ずるのみで、国際的道德観念の訓練は一つもない」と断じている。

中国の学生たちは日本人学生に「日本の帝国主義も少数学生の力で倒れる」、「支那の内乱は文明の一階梯だ」、「帰ったら革命を起こして政府を倒せ」などの希望を伝えている。

また、「広東広西調査旅行日誌」(一九二五年、六四六頁)には、一人の学生が自分の母に宛てた手紙が含まれている。

母さま、私は昨夕(三日)当地に着きました。(中略)戦争のために人民は只の三人宿の男と其の両親だけで、あとは猫の子も居りません。家の戸障子の様なものは何一つありません。ガラン堂です(中略)処が今朝になって急に大勢の兵隊が来ました。そして各戸に入って勝手に振舞って居ます。但し日の丸の旗の立ってある私共の宿には一人も来ません。有り難い事であります。

この二つの記述から見れば、当時両国の青年は、どちらも強い愛国心を持っていたことが伺われる。ただ、本質的な違いが存在していた。中国の青年らは外辱内患に直面して、民族を守る意識が強かった。民権解放思潮の影響を受けて、政府の役割を軽視していた。

すなわち、自国政府を否定していた。自国の利益を守るために、暴力革命を主張していた。このため、日本人の学生らが、中国各地を訪れるたびに、行く先々で反日の中国人学生からの攻撃を受けたのである。

日本人学生の愛国心は優越感の愛国心であろう。先の引用で見たように、日本人学生は当時の中国人学生たちが起こした反日デモや愛国演説を一顧だにせずにいる。中国人学生らには帝国主義と共和主義もわからないと思っていた日本人学生は、どこに行っても、日本国民として中国政府や軍隊から優遇され、自国への親近感を増していたことだろう。この意味で、日本人学生の愛国心は、自国政府を擁護し、政府を肯定する愛国心であった。

おわりに 『中国調査旅行記録』の現代的意義

一、中国人反日感情に関する誤解の是正

現在、日本のマスコミは、常に次のような論点を強調している。即ち、今の中国人の強い対日嫌悪感は、中国共産党政権の長年にわたる愛国教育の結果であり、さらに言えば、今の中国で行われている独裁専制の政治制度の結果である。もし中国が直ちに民主化を実施すれば、日中関係も直ちに改善できる。しかし、こうした議論は、まさに物事の本質を無視したものといえるだろう。八〇年前の東亜同文書院の学生らが書いた旅行記からも、当時の中国における強い反日感情を読み取ることができる。その後の満州事変や日中の全面戦争を経て、反日の苗は大樹に育ったのである。そして、八〇年前の記録において確認されることは、反日感情が最も強かった階層は、中国政府ではなく、中国のインテリと労働者であった。このように民衆の間に存在していた反日感情は、祖父から父へ、父から息子へ、最後は、現在の日中両国間の相互不信の巨大な溝になったものと思われる。このように問題の本質を認識すれば、問題の解決の糸口が見つかるのではないかと思われる。

二、中国の民主化に関して

この「旅行記」が書かれた頃は、中国で民主化運動が最も盛んであった時で、民衆は自由にデモに参加でき、参政も可能で、言論の自由度は過去や現在と比べても、最も高かった時期といえるだろう。しかし、この高度の自由の裏に、支配力を弱めた中央政府があった。内戦が頻発し、国民の福祉が保障できず、アヘン吸飲、汚職などの社会問題が深刻だった。結局、十数年続いた民主化と混乱が並存する情勢は、蒋介石の北伐戦争により終わりを告げた。中国における新しい独裁時代が始まった。今、経済高速発展の中で、中国の人々は将来必ず民主化の道を取ると信じているが、どのようにして二〇年代に起ったよう

な混乱を避けるか、これは中国国民にとって、最も大きな問題といえるだろう。

三、相互にずれのある四つの像

中国人から見た日本と日本人自らの見た日本、あるいは日本人から見た中国と中国人自らの見た中国、両者を比べると、様々な違いが出てくると思われる。ただ、第二章の最後で述べたように、当時の日本人学生は二つの中国像をもっていた。雄大な中国伝統文化を背景とする理想的な中国と、様々な深刻な問題を抱えていた現実の中国である。この二重性は現在までも続いている。例えば、電車の中の読書で中国古典文学に陶醉していたにもかかわらず、電車から一步スーパーに入ると、目の前に陳列されている中国製商品を疎ましく思うなど。ほとんどの反中派の学者が中国通である。漢籍を習熟し、歴史知識を運用しながら、現実の中国を批判している。その一方、中国でも、八〇年前の一面的な反日感情から今の両面有する対日認識に変わった。ほとんどの中国人が、一九世紀末から二〇世紀半ばまでの歴史を問題視しており、日本の戦争責任や損害賠償をめくり様々な論議が現在でも続いている。その一方で、日本製商品の品質を認め、日本人の礼儀正しさと真面目さに感心し、もっと日本に学べ、他国の歴史を糾弾するだけでなく自国の歴史も一層正確に記述せよ、という声もインテリ層をはじめとする多くの国民の間に出ている。

日中両国民に見られるこの四つの認識は、四つの方向から来た追い風のようなものである。この四つの方向からの風の力は一つの大きな力を合成し、今後の日中関係を発展の方向へ導くことだろう。

四、本稿の執筆動機について

1、新たな歴史認識の模索

近年、日中両国間の歴史認識に関して、常に論議が生じている。簡単にどちらが正しいか、正しくないかとの判断を下すことはできない。地球の上で地球を見れば、地表の形状は常に平らになっているように見える。しかし、月の上から地球を見れば、地球は丸く見える。しかも、この丸い様子が地球の本当の姿である。東亜同文書院に所属する学生の書いた「中国調査旅行記録」に対しても、日本国内では貴重な調査資料とされているが、中国国内ではスパイ活動によって得られた情報ではないかと主張している学者もいる。それぞれが自分の立場を固守し、狭い空間で研究を進めならば、問題の本質を発見するのは難しいことだろう。そして、論議が生じる源になると思われる。時には金星の上に立ち、時には土星の上に立って、地球の形状を観察すれば、どうだろうか。もしかすると、今まで発見されることのなかった地球の姿が見られるかもしれない。また、中国古来の伝統によ

ると、歴史の真実は何よりも大切だとされている。権威に屈服せず、歴史の真実を守るために、自らの命を捧げた「史官」(注3)たちは今までも讃美されている。以上の理由で、中国でひとたび培った歴史認識を見直し、自らの手で歴史の真相を見つけ出したいと思い、本稿を執筆した。そして、この研究を通じ、当時の中国社会の実態や日中関係に関する新たな認識をいささかなりとも探り得たのではないかと考えている。

2、青年としての責任

本稿で取り上げた時代から見て約八〇年後となる今日の日中両国の青年には、すでに大きな違いが出ていると思われる。今の日本の若い世代は、政治に無感覚になり、人生を無意味なものと感じる者が増えた、などの声もしばしば耳にする。中国の場合には、二つの側面が見られる。一方は、一人っ子世代に顕著な特徴で、成年になってからも依存性が強く、中国青年の全体が弱くなっているとされる面である。もう一方は、経済の高速発展を背景に、拝金主義が生じ、伝統的道德観を軽視する現象が多く生じている面である。

中国には、「万卷の本を読み、万里の道を辿り」という慣用句がある。これは若い人を成長させる一番良い方法のようだ。東亜同文書院の日本人学生はまさにこの慣用句のとおり、さまざまな困難を乗り越え、授業で習った知識を活用し、実際に中国のさまざまな裏面を探求したのである。また、より公正な言葉で当時の中国社会を記録している。

その一方で、中国の青年は内戦状態にある祖国に対してそれぞれ個人の責任を感じ、衰弱しつつある国を救う方法を探していた。

われわれの世代もまた、八〇年前の日中両国の青年のように、自国の運命を案ずる気持ちを常に自分の胸に抱き、どのような困難をも恐れず、世界へ向けての強い探求心を持ち続けるならば、日中両国とも強い国となるよう導いていけるに違いないと思われる。

注

注1 . 愛知大学の前身である東亜同文書院の学生たちが学校へ提出した日記記録を、愛知大学文学部藤田佳久教授が編著者となって活字化したものである。東亜同文書院は一九〇一年(明治三四年)東京東亜同文会により設立された日本人のための高等教育機関で、所在地は上海、一九三九年大学に昇格し、一九四五年当時の中国国民政府に接收され、廃校になった。

注2 . 入力できない漢字、「僕」の異体字と思われる。

注3 . 「史官」とは、中国歴史上、当代の歴史記録に従事する官職の通称である。

参考文献

一、本文・注釈

『中国を歩く』藤田佳久編著、東亜同文書院・中国調査旅行記録第二巻、大明堂出版、一九九五

二、研究論文

・日本語

竹内義雄 一九三六 『支那思想史』岩波全書七三

東京日日新聞社・大坂毎日新聞社編 一九三九 『支那人』東京日日新聞社出版

服部宇之吉 一九二六 『支那の国民性と思想』京文社

・中国語（ウェブで公開されていたテキストを参照）

李大钊 一九九九 『李大钊全集』河北教育出版社

程鴻詔 一九六九 「ヨ正葵伝」『程鴻詔 有恒心齋全集』文集八、台北、文海出版社

戴季陶 一九二四 『孫文主義の哲学基礎』民智書局

王屏 二 四 『近代日本のアジア主義』商務印書館

春秋BLOG http://blog.cqzg.cn/html/8/category_catid_8.html（二 六年一〇月参照）

万方数拠 <http://scholar.ilib.cn/abstract.aspx?A=bflc200306012>（二 六年一〇月参照）

博覧群書

<http://www.gmw.cn/02blqs/2001-12/07/02-2AB7C3284611EE6F48256B56002B6D61.htm>

（二 六年一十一月参照）

珍本書店 <http://www.bookchinese.com/bookdescript.asp?bookid=017526>（二 六年一十一月参照）

要旨

本稿では、一九二〇年代に、東亜同文書院の日本人学生らの記した「中国調査旅行記録」を基礎資料として用い、当時の日本人学生が中国各地での体験を通じて記録した中国社会の実態を概観していく。その中で、小学生や茶楼の美妓から政府官員までの各階層の中国人の対日観、洋（外国勢力）、民（普通の国民）、官（中国政府）によって構成される三

角形の中国社会構造の変動、そして日本人学生らの対中観を分析し、五四文化革命期の日中交流の特徴を把握することを試みる。

これは、日中両国民相互の理解・認識を歴史的に考察し、過去のさまざまな社会実態を分析することを通じて、今後の中国社会の進むべき方向を探り、さらに日中関係を再考する手がかりを得ようとするものである。そうすることで、日中両国の青年が担うべき責任を真剣に思考し、探究することができるであろう。